



蔦田:札幌医科大学にはMD-PhDコースがあります。私は将来、臨床と研究のどちらに進むか悩んでいるのですが、学生のうちから研究を始める意義は何でしょうか?

医学部長:私が学生のころは、MD-PhDコースのようなものではなく卒業後2~3年目から研究を始める人が多かったです。私は、大学卒業後すぐに大学院に入り基礎研究を始めたので、比較的若いうちから臨床だけでなく、基礎研究のおもしろさにも触れることができました。今はほとんどの方が大学卒業後2年間の初期臨床研修を受け、専門医の資格取得を目指す後期臨床研修へ進むため、基礎医学に触れる機会が少なくなっていますね。大学としては、臨床医の育成はもちろんのこと、やはり基礎医学者の育成も重要な役割だと感じています。学生のうちから研究を肌で感じ、楽しさを理解してもらえそうな仕組みとして、MD-PhDコースが完成しました。実際に見てみたい、経験してみたい、物事のおもしろさや自分自身にとっての向き不向きはわかりませんよね。学生のうちから研究を始めることで、将来を考えるきっかけがつかめると良いのではないかと思います。

蔦田:現在は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で学生同士のつながりや、実習なども減ってしまいました。このような環境の中で医師として必要なコミュニケーション能力を磨くには、どのようなことに気を付ければよいでしょうか?

医学部長:コミュニケーション能力を磨くには、実際にコミュニケーションをとることでしか身につけることができないと思います。本を読んでその能力を養うことは難しいですね。いまの子どもたちはWEB世代で、人と直接コミュニケーションを取らなくても生きていける時代の中にいますが、やはり人と接する機会を作り出すことが必要です。学生生活を通じて、部活動やアルバイトなどを通じて多くの人と触れ合ってください。人とのコミュニケーションの中で、時には失敗しながら自分を見つめ直し、学んでいくことで人間は成長することができます。コロナ禍の影響で、今の1年生~3年生はオンライン講義も多く、友達を作ることも難しくなったかもしれませんが、今後は“withコロナ”社会の中で、実習を中心に大学へ来る機会が増やせるよう、また人とのつながりの場が増やせるよう、大学としても努力しています。

ディプロマ・ポリシーをより深く知るために



蔦田 瑛功

Makita Eriku
医学部医学科 第3学年
札幌南高等学校出身
一般入試(先進研修連携枠)

工藤 祐奈

Kudo Yuna
医学部医学科 第3学年
室蘭南高等学校出身
推薦入試(先進研修連携枠)

医学部長

齋藤 豪

Saito Tsuyoshi

◆ディプロマ・ポリシー 1

倫理観・社会的責任、プロフェSSIONALISMに関する内容(態度)

高い倫理観・責任感を備え、医療者としての使命感をもって患者の立場を重視するとともに、研究マインドをもって医学・医療に生涯を通じて貢献できる。

◆ディプロマ・ポリシー 2

地域医療、研究、国際貢献に関する内容(関心・意欲)

幅広い視野をもって積極的に地域医療を担う意欲を育み、先駆的研究に関心をもち国際的な医学・医療の発展に貢献する。

◆ディプロマ・ポリシー 3

基本的医学知識と基本的技術、コミュニケーション能力に関する内容(知識・技能)

基本的な医学知識と技術を習得し、協調性と指導力をもって診療や保健指導、医学研究を実践できる。

◆ディプロマ・ポリシー 4

問題解決・課題探求能力に関する内容(思考・判断)

現状に潜む問題点を課題として提起し、科学的根拠および適確な方法に基づく論理的思考を通して自ら解決できる。



工藤:コロナ禍の影響で、3年生の多くの学生は、入学時からオンラインでの講義や実習が多く、以前の学部生とは異なる学修体制となっています。このような大学生活の中で、今後、医療者として求められる高い倫理観や責任感とは、どのように

して身につけていけばよいのでしょうか。
医学部長:医師になるということは、看護師をはじめとするメディカルスタッフで構成されるチームリーダーとしての役割が与えられます。それは患者さんの治療方針に対する最終決定者であり、責任者で



す。また、治療のことだけでなくチームの人間関係のとりまとめなどもリーダーに求められる重要な役割です。そのために高い倫理観や責任感が必要になってきます。私自身、学生時代に高い倫理観や責任感を意識して生活してきたかという、それは疑問です。後から振り返ると、いわゆる学生気分を脱ぎ捨て、医師としての自覚を身につける努力をすべきだったと反省しています。医師になるために必要な倫理観や責任感を身につけるためには、学生が学びを通じて物事へ気づき、自分自身で考えられるような環境づくりが必要だと考えます。札幌医科大学では、少しでも早く将来の自分があるべき姿に気が付き目指すことができるように、



1年生から始まる地域での実習や医学概論の講義など、さまざまなカリキュラムを用意しています。

蔦田:講義を受ける中で地域医療、研究、国際貢献など、医師として求められる事

が多岐に渡ることを知りました。どのような事を心がけて学生生活を送ることが必要でしょうか?

医学部長:地域医療や国際交流については座学でも学びますが、なかなか実感を理解することは難しいですね。札幌医科大学では地域での実習もカリキュラムに組まれていますが、実際に地域に出向き、見て聞いて、何が重要とされているのかを体感することが重要だと思います。また、その世界に入っていくことで、自分がやらなければならないこと、やりたいことを感じることができると思います。コロナ禍のため近い将来に海外へ行くことは難しいかもしれませんが、海外で学ぶことも今後の人生の選択肢に入れてほしいですね。海外経験を通じて物事の考え方が変わったり、日本のことが好きになったりと、いい刺激がもたらされます。医師になり歳を重ねて振り返ったときに、海外経験の思い出は貴重なものとなりますよ。

工藤:ディプロマ・ポリシー 2の中で、「幅広い視野」という言葉がありますが、地域医療を担う上で、医師がもつべき「幅広い視野」とは具体的にどのようなものなのでしょうか。

医学部長:先ほども少しお話しのように、医師は医療従事者のチームリーダーとしての役割が求められます。治療のことだけでなく、異なる価値観や考え方への折り合いの付け方、人としてのユーモア、キャリアを重ね病院経営に携わるときには、政治や経済に関する情報に対しても理解判断できる力が必要となりますね。「幅広い視野」で人や環境をみて、最善と思われる判断を常にしていくことが、チームリーダーに求められることであり、重要なことです。

工藤:1年次の「新入生チュートリアル」で、問題解決・課題探求能力を磨けたと感じています。今後、学年が上がってから、講義などの日常生活において、医療に関する論理的思考を鍛えるにはどうしたらよいのでしょうか?

医学部長:なかなか難しい質問ですね。答えになっているかはわかりませんが、常に問題意識を持つことが最も重要だと思います。高校生のころは教えてもらうことが多かったと思いますが、問題意識を持ち、考えることで自分の意見が持てるようになります。問題意識を押し付けるのではなく、いろいろな現場をみて学生自身で問題に気づき、感じることでできる環境をつくるのが、大学教育のあり方、役割だと考えています。